

## 公一〇

### 植生マダニの駆除とその効力評価 ～SFTS 対策の一手法として～

○木村俊也<sup>1)</sup>、鋤田龍星<sup>2)</sup>、南 博文<sup>3)</sup>、小林大介<sup>4)</sup>、伊澤晴彦<sup>4)</sup>、前川芳秀<sup>4)</sup>、比嘉由紀子<sup>4)</sup>、林 利彦<sup>4)</sup>、五十嵐真人<sup>5)</sup>、葛西真治<sup>4)</sup>、澤邊京子<sup>4)</sup>

<sup>1)</sup>愛媛県食肉衛生検査センター、<sup>2)</sup>岡山理科大学・獣医学部、<sup>3)</sup>南動物病院・愛媛県、

<sup>4)</sup>国立感染症研究所・昆虫医科学部、<sup>5)</sup>日本防疫殺虫剤協会

**【はじめに】**西日本を中心にイヌやネコへの重症熱性血小板減少症候群(以下、SFTS)の感染例が報告されている。本県においてもネコの発症例が確認され、発症1ヶ月後に周辺環境で捕集した植生マダニから感染ネコと同じ遺伝子型のSFTSウイルス遺伝子が検出され、その1年前には隣地区でヒトへの感染例が報告されていた。そこで、飼い主を含む周辺住民の健康被害が危惧されたことから、マダニ用殺虫剤の散布による植生マダニの駆除を行うとともにその効力評価を行ったのでその概要を報告する。**【材料及び方法】**本県に植生マダニ駆除の相談に対応できる専門家がいなかったことから予防啓発と人材育成を兼ね『マダニ駆除研修会』として駆除を行った。殺虫剤は地形・植生等を考慮して、①動力噴霧器が不要で軽くて機動性があり、複雑な地形・植生の場所でも短時間で広範囲に散布できる『炭酸ガス製剤(フェノトリン1%)』と、②動力噴霧器(5.3kg+150タンク)を必要とし、効果は長時間持続するが散布に時間を要する『マイクロカプセル製剤(プロペンタホス20%)』を選択した。殺虫剤散布の効力を評価するため、①と②の両殺虫剤を併用散布したエリアAと、①のみ散布しエリアBにおいて、散布の前日・翌日・8日後・16日後・28日後・53日後・108日後・139日後に植生マダニを捕集し評価した。自動撮影カメラを5ヶ所に設置し野生動物の侵入状況も調査した。**【結果】**研修会は地元住民、地元市、保健所、地衛研、ペストコントロール協会、大学等から約50名の参加を得て、午前には講演、午後から駆除実演を行った。植生マダニの捕集数は、エリアAでは87頭(30分/1人、以下同じ)・3頭・9頭・15頭・1頭・6頭・18頭・32頭、エリアBでは135頭・9頭・21頭・43頭・28頭・58頭・93頭・100頭であった。全ての自動撮影カメラは多数のイノシシの他感染ネコ、タヌキを撮影した。**【考察】**いずれの殺虫剤も高いマダニ駆除効果があったが、殺虫剤併用のエリアAでは散布後約4ヶ月間はマダニ密度が比較的強く抑えられた。マダニは我々の身近な野山に生息しておりその生息密度は野生動物の侵入頻度に依存することから全ての場所で殺虫剤散布による植生マダニの駆除は困難である。SFTS患者(伴侶動物を含む)発生の緊急時や患者発生地域での野外イベント開催前等の殺虫剤散布は有効な手段であるが、マダニ対策で最も重要なことはマダニから身を守る服装や方法を知り実践することである。